

レポーター  
探訪記

## 『馬毛の毛網』生産技術確立へ

## 寺泊山田の曲げ物×造形大 長岡の産学がタッグ

馬の毛で織る「馬毛の毛網」再生に挑む人たちがいる。毛網は、和食の料理人らが昔から愛用する曲げ物の「裏ごし」製作に欠かせない資材。かつては農閑期の内職として各地で織られていたが、織り手の高齢化などで調達が難しくなっている。

長岡市寺泊山田で江戸時代から続く曲げ物製造の「足立茂久商店」と長岡造形大学は、「長岡市ものづくり関連支援事業(3大学1高専ワンポイント活用事業補助金)」の採択を機に、馬毛の毛網再生に協働で取り組み始

めた。同大地域協創センター長の金澤孝和准教授と、織物を専門とする菊池加代子教授が参画。途絶えかけた毛網織りの技術を解明し、現代に即した生産方式を見いだそうと3年がかかりで研究を進めてきた。このほど、汎用織機で毛網を試作する段階までこぎ着けた。

足立茂久商店11代目の足立照久さんは、試作の毛網を実際に裏ごしに張ってみて「網の質感や張りは従来のもものと遜色ない」と感じたという。「日本の伝統文化を守るための、大きな一歩になると思う」と話している。

道は平たんではなかった。まずは毛網と原材料の馬毛の組成を明らかにしようと、新潟県工業技術総合研究所の素材応用技

術支援センター(見附市)に試験調査を依頼。一方で、現存の製品を基に織りの密度を割り出し、試し織りを繰り返しながら、想定される製作工程を一つずつ検証していった。

毛網はもともと、足を伸ばして床に座した姿勢で操作する「居座機」で織られていたが、作業効率や今後の織り手の育成を考え、椅子式の汎用織機を採用。併せて、経験がなくても安定した織り目の毛網が織れるように、毛網織り専用の筵(経糸を整え、織りの密度を決める道具)を開発した。

以前から足立さんのものづくりに関心を寄せていた新潟市在住の山田公子さんが、この春から菊池教授の元へ通い、改良した汎用織機で毛網の試作に励んでいる。「あとは経糸を織機に準備する技術などを覚えてもらえば、一人で織れるようになるでしょう。毛網再生の先が見えてきた」と菊池教授。

金澤准教授は「今が最後のチャンスなのだと思う。ただ道具だけ復活しても解決しない。代替できない馬毛の裏ごしの価値や、裏ごしを使って作る食の価値を、広く知ってもらうことも大切だ」と話していた。

①「多くの方の協力でここまでたどり着けた」と話す足立照久さん

②毛網再生に取り組み(右から)長岡造形大学地域協創センター長の金澤孝和准教授、菊池加代子同大教授、毛網織りを、修業中の山田公子さん

③織機で馬毛の毛網を織る様子

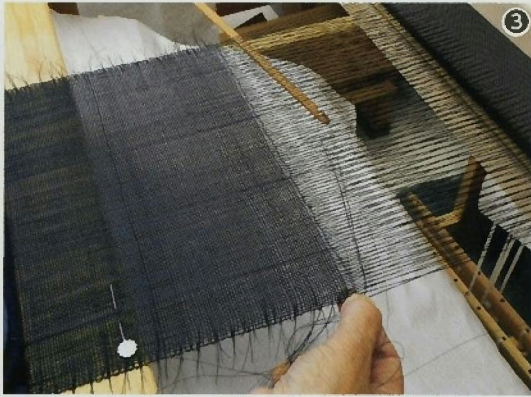
④試作第1号の毛網を張った裏ごし



①



②



③



④